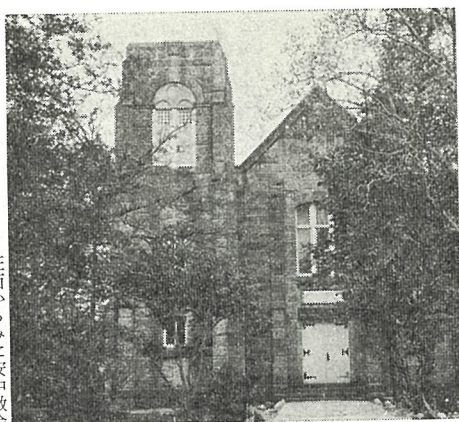


同志社

歴史散歩

安中

江川 栄



正面からみた安中教会

安中は信越線高崎から三つ目、碓氷峠の裾のはし、中山道の旧宿場町。朝夕の上州三山の眺め、冬の青空、からっ風、春のおそ霜がその風物。一八七四年ドイツ版日本地図では群馬県内の地名は安中と高崎だけ。新島先生のおかげで早く知られたものか。先生は天保十四年（一八四三）江戸一ツ橋の安中藩邸に生れ、藩主板倉勝明公に愛でられ、十四歳で蘭学、十九歳で数学、航海術を学んだ。これが若き日の先生を知的に目ざめさせたらしい。

先生は安中教会の祖である。明治七年（一八七四）三十二歳、滞米十年の勉学ののちここに帰り、西洋文明とキリスト教信仰を語った。その四年後、湯浅治郎夫妻を初め男女三〇名が先生から受洗、安中教会を興した。彼らは湯浅が建てた養蚕所を改築移転して「碓氷会堂」と名づけ、三十六年間ここに礼拝した。大正八年（一九一九）今の広い土地に、大谷石造り六〇坪、ゴシック風の新会堂を建て、右もここに移して日曜学校兼二葉幼稚園舎に充て、それに加えて武家屋敷を買いとり、移して牧師館とした。総工費三三、一八八円（会堂一九、八五六円）。その立案推進者は湯

浅翁、設計は古橋柳太郎氏。新会堂正面玄関の大理石には新島家の家紋「根笹」が彫みこまれ、内部仕上げは節なしの米材と日本のけやき材。六つの米国製大型球形シャンデリアが輝く、秋吉台産白大理石の円柱と小川三知作の絵窓——中央に十字架と白ゆり、左右にベツレヘムの星とギリシャ語略字「キリスト」を配した——が聖壇を飾り、壁には湯浅一郎筆「新島 襄」と「湯浅治郎」と「ジエローム・デヴィス」、岡精一作「柏木義圓」松岡素筆「海老名弾正」の油絵像が美しい。いづれも名作。中でも新島像は先年同志社によって原色のまま複製頒布された。

会堂北側にはこの十年間に計一、二〇〇万円に上る二葉幼稚園々舎が次々に建てられ、二〇〇名の園児が喜遊している。更に去る三月には長年使ひふるまれた「碓氷会堂」が「教育館」として近代的に改築され、教会学校、金蘭青少年の諸集会ほか各種各様の活動に連日用いられている。

明年九十周年を迎えるこの教会の歴代の牧師はみな同志社人——海老名弾正、杉田潮、柏木義圓、江川栄諸師、それに短期在任の武田猪平、増田悦興、柏木寛吾の三先生。同志

社人の来訪も絶えない。四年前「同志社精神研究会」と大書した旗指物を掲げた五人の学生が安中を目指し、大津から中仙道經由、歩いてきた。昔新島先生が四人の学生と歩いた足跡をしのぶためとのこと。

＊

教会の前の坂をおり、四辻をこえ、橋を渡ると、そこに新島学園が見える。終戦の秋、湯浅正次氏は家業を継ぐに当り、亡父三郎氏の志を汲み、勘からぬ資金と土地建物を提供して学園設立を決意した。家人がそれを支持し、一族が賛同し、信徒たちが歓呼した。種種準備を整へ、昭和二十二年（一九四七）五月五日端午の節句の日、碓氷川畔の旧蚕種工場跡に開校、生徒八二、教職員一〇名、理事長校長湯浅八郎博士、校長事務取扱江川栄牧師黒板、白墨に不自由し、教室は土足、服装はまちまち。だが誰もかれも清い明るい喜び、望みに溢れた。翌一周年目の開校式に左の五原則が公表された。

- 一、キリスト教を徳育の基とする。
- 二、生徒を愛し導く。
- 三、知識水準を高くする。
- 四、勤労を尊ぶ。

五、広く世界を友とする。

学園の評判は良かった。安中を初め県内外の心ある父兄は子弟を送った。良い先生が集った。こうして三年目には原市の柏木隼雄牧師を二代校長に迎えることができた。かたわら新校舎が建ち、校庭が拡がり、寮舎、講堂かできた。柏木校長は在任十二年創業期の大任をよく果たし、昭和三十六年病氣隠退された。次で同八月同志社大学学生部長岩井文男牧師が就任、ここに学園は飛躍前進充実の時を迎えた。教職員はいよいよ一致し、父兄は動き、学風、進学率は共に高まり、校内クラブ活動は活潑化した。わけでも蹴球部は昨年一躍全国高校第三位に進んだ。一方、新設備として理科教室を作り、体育館に三、六〇〇万円を投じ、この春は約四、〇〇〇万円の鉄筋コンクリート三階建の寮舎を増設した。現在生徒七四〇名、教職員三十六名（内同志社人六名）年間収出四、七〇〇万円。安中教会と共に新島先生の生きた記念碑。最近は共学も論議されている。

＊

天然記念物杉並木の入口を左折すると新島先生の父民治夫妻の旧宅がある。

先生は、明治七年十一月二十六日横浜着、東京より人力車を急がせて二十八日夜半安中着、宿屋に一泊、翌早朝、ここで両親と涙の対面。これまでの事、わけでもハーディ夫妻の恩義を語る。父は感極まって「ハーディ様は神さまだ」といい出す。先生は「いや、それならハーディ家が信仰する神を信ずるがよい」とおしとどめる。両親は家の中のお札、仏像などを取払った。家はのち人手に渡り、荒廃したが、去る三十九年安中市が三〇〇万円を出し、これに地元、県内、同志社、その他の有志の寄附四〇〇万円を加え、これを買いと、やや北に動かし、慎重考証の末、みごとに昔の姿に復元し、兼ねてここに往時をしのぶ品々を展示した。みるからに幕末下級武士の家のたたずまい、その営み、当時の造作、手仕事の様（さま）が目に見え、浮ぶ。

なおこれより数歩のところには原市の半田善四郎氏が昭和二十七年独力で建立寄贈された「新島 襄先生記念碑」があり、その隣には日本新体詩の草分け、湯浅半月の「十二の石塚」の詩碑がある。昭和三十年、全国の有志献金による。